三番叟は、10月28日～30日に行われる白浜神社例大祭において、29日早朝に奉納される行事です。

少なくとも江戸時代から続く伝統あるものですが、昭和32年を最後に5年間中断した時期がありました。

その際、三番叟復興に尽力されたお一人である佐々木源也さんから、当時の様子やこれから大切にしていきたいものなどをお聞きしました。

―佐々木さんが三番叟を始めたいきさつなどをお聞かせください。

昭和29年、17歳のときに「翁」を舞いました。

昭和29年の三番叟演舞者（一列目中央が佐々木さん）

当時は青年団という組織があり、三番叟を奉納することになっていたので、中学校を卒業すると自然と入りました。

言い伝えでは、「両親健在の長男」しか舞うことができない、とされていましたので、相当な使命感を持ってやった覚えがあります。

―練習の思い出などをお聞かせください。

師匠が気に入ってくれなくて、手首の返しなど、何度も同じ動作をやらされました。

しかし、それが大事な所作だと叩き込まれたので、自分が師匠になってからもその部分を重点的に教えました。

―役はどのようにして決めるのですか。

ある程度はみんなで決めるのですが、体型などを見て、激しい踊りを要求される黒面は小柄でしなやかで細見な人間、という風に師匠から指名されました。

～伝統をつないでいく重要性～

佐々木（ささき）　源也（もとや）
昭和12年生まれ。
佐々木さん自身も昭和29年、38年の2度「翁」を演じている。
現在も後進の育成に努め、様々な場面で三番叟の魅力を伝えている。

―本番はどのような雰囲気でしたか。

今はそういうことはしませんが、前日に宮司の自宅に泊まって身を清めました。29日の早朝、神殿の中で舞う奉納三番叟は「神様の前で舞う」特別なものなので相当な緊張感がありました。やはり当時は一生に一度、という気持ちもありましたし。

―記録を見ると昭和32年を最後に5年間三番叟が中断してしまっています。

その後、昭和38年に再度佐々木さんが翁を演じています。この中断のいきさつや、三番叟復活に至った経緯をお聞かせください。

当時、若者が他県に職を求めたり、仕事も忙しくなったりして余裕がなくなってきたのが要因の一つだと思います。

三番叟は、原田、長田、板戸の3地区が一年交代で奉納するものですが、昭和32年の中断前の三番叟は3地区合同で行ったものです。三番叟は3地区それぞれ舞い方が微妙に違うのでしっくりこない。

そういった事情もあり、中断せざるを得ませんでした。

三番叟復活のきっかけは、消防団の集まりのときに雑談の中で三番叟の話になりました。ふと周りを見渡すと経験者ばかり。

それならみんなで協力して復活させよう、ということになり、昭和38年は急遽行いました。練習も1週間ほどで叩き上げてやりました。

その後周囲の機運も高まり、昭和40年に「三番叟保存会」が立ち上がり、衣装などは保存会で調達し、演者は消防団が担当するなど現在のような仕組みが出来上がりました。

―その後現在まで三番叟は受け継がれています。しかし、平成22、23年も一旦中断してしまったことがあります。今後もこの伝統（下田まち遺産）をつないでいくために大切なことをお聞かせください。

今は若い方々が一生懸命努力していますが、この次の世代となると人が集まる機会が少なくなってきています。

しかし、一度三番叟を経験するとみんな不思議と熱を帯びてきます。

人が集まる機会の創出とその情熱を次に伝えることではないでしょうか。

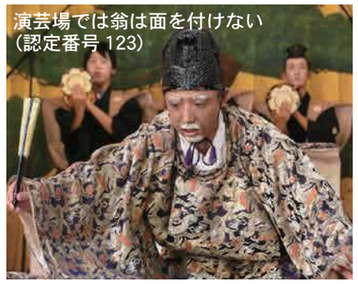
まだまだあります！ 白浜にまつわる下田まち遺産 ～そして三番叟のひととき～

白浜神社、火達祭（ひたちさい）、御幣流祭（おんべいながしさい）、白浜神社末社、御三釜（おみかま）、白浜大浜海岸、白浜中央海岸、そして天草倉庫と、三番叟の他にも多くの歴史、文化、自然が下田まち遺産に認定されています。

今回の三番叟の様々な様子とともにご紹介します。

伊豆七島の神々に祭りの始まりを知らせる火達祭（認定番号111）

正午に演芸場で行われる三番叟のために地元の女性が化粧を施す



演芸場では翁は面を付けない（認定番号123）

夏は海水浴客で賑わう白浜大浜（認定番号18）

神々に祭りの終わりを知らせる御幣流祭（認定番号112）

～景観担当の目～ 下田まち遺産を未来へ残していくために必要なこと

下田まち遺産

〝賀茂郡下の多くで舞われていた三番叟〟

南伊豆町の子浦や妻良、河津町の見高をはじめ、賀茂郡下では様々な地域で三番叟が行われています。

しかし、過去の調査を紐解くと現在行われていない地区も含めると計28か所、伊豆半島全域まで広げると45か所もの地区で人間ないし人形の三番叟が奉納されています。

これは全国的に見ても珍しく、下田市だけを見てみても、中村、本郷、須崎、北湯ヶ野、箕作、須原の計6地区の神社で過去三番叟が奉納されていたことが分かりました。

残念ながら、これら下田の各地域のものは大正から昭和にかけて人手不足などにより廃絶してしまったようで、舞い方や衣装などが現存していないことが多く、復活は難しそうです。

〝地域への取材を通して分かったこと〟

地域の伝統・文化・芸術を継承していくための担い手不足は現代の人口減少社会だけの問題ではありません。

9月初旬に発行した「下田まち遺産手帖第15号」では田牛八幡神社の「獅子舞」を特集させていただきました。

田牛の獅子舞も昭和40年代に一度消滅の危機を迎えますが、その後保存会が立ち上がるなどしてその伝統を現在までつないできています。

そして今回の取材でも、三番叟は昭和30年代後半に一度消滅の恐れがあったことが分かりました。

約50年前の世の中でも伝統が失われる危険性があったことを認識することが、今後多くの「下田まち遺産」を未来へ残していく手がかりの一つになるのではないでしょうか。